おくのほそ道

活用例

学習指導要領との対応

中学校学習指導要領（平成29年告示）国語第3学年 p.36 「ア 歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむこと。」

調べ方

- ① 教科便利事典 | 国語>文学作品>おくのほそ道
- ② 教科便利事典 | 国語>文学者>松尾芭蕉

読む

作者について調べる

『ブリタニカ・スクールエディション』で、松尾芭蕉の生涯と旅路を調べ、時代背景を理解させる。

検索ワード

「松尾芭蕉」、「おくのほそ道」

松尾芭蕉はどのような旅をして、俳句の世界を広げていったのだろう。

松尾芭蕉

まつおばしやう

1644年から1694年まで生きた、江戸時代前期の俳人です。「俳聖（すぐれた俳人）」といわれ、与論庵村、小林一茶とともに、江戸時代を代表する俳人として知られています。代表句に「閑かさや岩にしみ入る蝉の声（あたりはとても静かで、セミの声が岩にしみこむようだ）」「五月雨をあつめて早し最上川（五月雨が降り続いて水かさの増えた最上川は、なんと流れが早いのだ）」などがあります。

松尾芭蕉（まつおばしやう）の再像画（しょうぞうが）

アフロ

読む

俳句を知る

俳句の意味や表現の工夫に着目させ、古典表現に親しませる。

検索ワード

「おくのほそ道」→ 小見出し をチェック

芭蕉がよんだ有名な句

この部分を印刷

「夏草や 兵 どもが夢のあと」
 「武士たちが手ががらを夢みて戦った土地に、いまはまだ夏草がおいしげっている」
 芭蕉が岩手県の平泉をおとすれたときよんだ句です。この句は、芭蕉が500年ほど前、長い間栄華をほこりましたが、源頼朝とともに、源頼朝の死後、500年後、当時はなやかさも、はげしい戦いの跡も、芭蕉は人の世の移り変わりに思いをはせました。

「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」
 「あたりはとて静かで、セミの声が岩にしみこむようだ」
 芭蕉が山形県を旅していたときに、人々にすすめられた「野ざらし紀行」にも、芭蕉の旅への心残りがかめられています。

芭蕉がよんだ俳句にはどんな意味が込められているのだろうか。

発展

芭蕉が旅した土地を調べる

それぞれの土地の風景や歴史を調べ、作品の歴史的背景について理解を深めさせる。

検索ワード

「最上川」、「山形県」、「平泉」、
「中尊寺」、「岩手県」など

芭蕉は最上川や中尊寺金色堂を見て、何を感じたのか考えよう。

活用のポイント

- 1 俳句の情景をとらえることで、表現の奥行きや味わいを感じ取ることができる
その土地や建物についての理解が進むと、古典の言葉の意味がより明らかになる。
- 2 作者の人物像や時代背景を知ることが、旅の様子の具体的なイメージにつながる
芭蕉が見た風景を、自分の目で見ているかのように感じ取ることができる。